

駅伝の快樂 「第51回九州一周駅伝」物語の構造分析

山本 教人（九州大学健康科学センター）

物語としての駅伝

駅伝やマラソンのすべてを直接的に体験できる者など誰一人として存在していないといった意味で、それらはかなり特異なスポーツである。このように、少なくとも論理上は、完全には理解し得ず、それ故に語り尽くし得ないはずの出来事を、我々にとっての関心事、経験に仕立て上げるのがメディアの物語る力である。

本報告では、平成14年11月1日から10日にかけて開催された、「第51回高松宮賜杯・西日本各県対抗九州一周駅伝競走大会」（以下「九州一周駅伝」と略す）を報じた西日本新聞の駅伝関連記事43枚（日刊の一面、スポーツ面、県総合面、社会面に11月1日から12日までに掲載された分）を対象に、物語の構造分析を試みる。

本報告での「物語の構造分析」とは、具体的には、新聞報道において、駅伝にまつわるどのような出来事や登場人物が、どのようなテーマ、筋書きのもとに関連づけられ記述、あるいは説明されているのか、さらに、あるテーマに沿って構築された駅伝記事が、他のテーマに基づく記事とどのような関係を形成しているのかを検討することを意味している。

物語の構造分析

1. 一面記事の構造

一面には駅伝関連の記事が1枚の写真とともに掲げられている。

「九州一周駅伝競走大会は4日目の4日、熊本市の西日本新聞総局前をスタートし、... 96.5^{キロ}で競った。福岡は今大会初で、6年ぶりとなる日間首位を奪取。」（11月5日付）

他の一面記事の多くがそうであるように、これは明らかにストーリーであり、その日どのような勝負が繰り広げられ、どのチームが勝利を手に入れたか、そして累計タイムでは各県がどのような位置にいるのかといったレース結果についての情報が記事の中心となっている。一面の駅伝記事は、「チーム間競争」を中心的なテーマとして構築されているととらえることができるだろう。

次に、一面記事に添えられた写真の内容について検討してみよう。掲載された10枚中7枚の写真に写し出されていたのは、晩秋の九州の風景や、九州という地方の歴史や文化に関連のある風物であった（たとえば11月9日付の、「色づきはじめて山あいを駆け抜けるランナー＝8日、大分県直川村」）これらの写真においてランナーは、晩秋の九州を表象する風景の一部として、固有名を剥奪され配置されているにすぎない。ここでは、「九州らしさ」が主題化されているのであり、九州一周駅伝はそうしたテーマと関連づけられる光景のひとつとして扱われている（つまり、「チーム間競争」がテーマではない）。

2. スポーツ面記事の構造

スポーツ面は、レース結果についてのデータ、どのような競争が繰り広げられたのかについての解説と関連する写真2枚、「ホープ激走」と題する囲み記事と記事の主役の写真1

枚，それにその日のレースの見どころについてまとめた記事を主な内容として構成されている。

区間ごとに各県チームの順位変動が示された折線グラフとその日までの累計タイム，および各県チームのタイム差が示された表は，この駅伝が一面記事の中心的なテーマ，すなわち「チーム間競争」であることを物語っている。また，その日各区間で出走した全選手についての順位と記録のデータは，九州一周駅伝が「個人間競争」でもあることを示している。だが，先の折線グラフの横に添えられた前年の県別のタイムは，「チーム間競争」が過去の同県チーム，そして他県チームとの競争でもあることを意味しており，個人の区間記録の横に示された区間新記録を示す逆三角形の印は，「個人間競争」が過去の個人との競争を意味するものでもあることを物語っており，このチーム間，個人間競争が言及する範囲はかなり広いということがわかる。

このような客観的に示されたデータをある観点から解釈し，それに説明を加えるのが，スポーツ面の半分ほどのスペースを占める記事である。ここにおけるプロットとしての記事はたとえば，「佐藤信 23 連続区間賞 ベテラン好走宮崎本領」(11月2日付)や「”高岡効果”2位つかむ 山口」(11月5日付)，などの見出し，あるいは「区間4位で精彩を欠く走りの宮崎・真内明(左)」(11月10日)といった写真につけられたキャプションなどにみられるように，その日のチーム成績をヒーローの活躍や不調といった観点からわかりやすく物語るといった特徴を持っている。つまりこれらの記事は，九州一周駅伝の中心的なテーマのひとつである「チーム間競争」を，「個人間競争」を主旋律にして解説，説明したものととらえることができるだろう。さらにプロットとしての記事は，チームの勝利や善戦に貢献したヒーローのプロフィールを紹介し，彼らの活躍をたとえば，「『あれだけの声援を受けたら気が抜けない。助けられました』。中継所で待っていた...夫人...と長男...に笑顔を送った。」(11月2日付)や，「『うっぶんを晴らす走りがしたかった』と、意地をぶつける快走は、...区間最高記録。」(11月6日付)といったように，「家族関係」や「雪辱」などの背景から解釈，説明しようと試みたりする。他方，チームが思うような結果を納めることができなかった場合，その原因は，活躍が期待されていた選手の故障やアクシデントといった外的な要因に帰属され，当該選手の責任を可能な限り軽減するようなやり方で説明される。

ところで，ここで取り上げられているのは，全国大会や国際大会で活躍するようなヒーロー選手の働きばかりではない。たとえば，33歳で初の区間賞を獲得した選手を紹介した記事(11月7日付)や，出走累計区間73という歴代最多の記録を樹立した選手のことを伝える記事(11月10日付)をスポーツ面に認めることも可能なのである。九州一周駅伝を報じる記事においては，競争の意味は最大限拡大されて解釈されており，駅伝に関わりのある誰もがヒーローとして取り上げられる可能性を排除できない仕組みになっていると考えられる。

こうした考えにさらなる根拠を提供しているのが，「ホープ激走」と題するプロットとしての囲み記事である。ここには，高校から鳴り物入りで実業団チームに入ったエリートランナーとともに，市民マラソンから精進を重ね栄光の舞台を踏むことになったランナー，学生ランナー，トライアスリートなど多様な背景を有する参加各県チームの経験の浅い選手が1名ずつ写真入りで取り上げられ，前日の走りがそうした背景と関連づけられながら

解説されている。「ホープ激走」で取り上げられているのは、こうした満足いく結果を残すことのできた選手ばかりではないが、活躍できなかった選手を主人公としたいずれの記事も、「『世界で通用する選手になりたい』という目標に向かって、九州路を飛躍の場にするつもりだ。(11月2日付)」「箱根へ向けくよくよしているひまはない。...ほろ苦い経験を、きっと成長の糧にする。」などの記述で結ばれているように、その日の失敗は、将来における成功のためのひとつのきっかけとして位置づけられている。「ホープ激走」は、言葉の最も広い意味においてではあるが、やはりヒーローを主題とした記事であるといえる。

スポーツ面で最後に検討されるのは、その日のレースの見どころについての記事である。ここには、その日の各県チームのオーダー表が掲載され、それに「2位スタートの山口が意欲的なメンバーを組んできた。...スピードのある選手をズラリと並べ、穴のない布陣。...宮崎は、マラソンで実績のある小島宗や三木、榎木らで山口に対抗。」(11月2日付)といったような記事が添えられる。ここにおいてもまた、予想される「チーム間競争」が「個人間競争」、特に注目選手を軸にして記述されているといった関係を認めることができる。

3. 県総合面記事の構造

県総合面における駅伝記事は、前日のレースにおける福岡県チームの順位争いを同県選手の走りに関わらせながら記述するストーリーであり、その構造は一面の駅伝記事と大変似通っているといえる。

とはいえ、一面とは異なる特徴をここに認めることもまた可能である。それは、写真の扱いである。一面とは異なりここにおいて写真は、「福岡県チームの順位争い」に沿って駅伝を構築する要素として位置づけられているといえる(たとえば11月10日付の、「1区の益永哲朗選手からタスキを受け走り出す2区の村上孝一選手(右) = 第1中継所」)。

県総合面の記事で、スポーツ面における「ホープ激走」に匹敵するのが、「ハイライト」と題する囲み記事である。「ハイライト」においては、前日出走した選手のひとりを取り上げ、当該選手が「福岡県チームの順位争い」で果たした役割について説明が加えられている。プロットとしての「ハイライト」で興味深いのは、選手の活躍は確かに「福岡県チームの順位争い」というテーマに沿って構築されているが、他に多様性に富むテーマと関連づけられてもいるということである。たとえば、イスラム教徒である選手を取り上げ、「イスラムの誇り、走りで伝える」と見出しをつけたの記事(11月9日付)は、「郷土愛」といった観点から読むことも可能である。また、チーム最年長選手の活躍を取り上げ、「初出場の10人を含む若手選手たちに、...『走りの哲学』を伝えたい。」と締めくくる記事(11月6日付)や、「最年少 気負わぬ走りで見出しがつけられた高卒ルーキー選手の活躍を報じる記事(11月7日付)は、「世代間関係」をひとつのテーマとしていると考えることもできるだろう。

ところで「ハイライト」には、「福岡県チームの順位争い」に貢献した選手ばかりではなく、思うような走りができなかった選手も取り上げられていた。こうした失敗レースを扱ったどの記事も、「『あらためて痛感した1秒の重みと粘りの大切さ。それを今後の人生に生かしたい』と前向きな姿勢で汗をぬぐった。」(11月10日付)のように、駅伝におけるその日の失敗を、次のレースや他の生活領域における将来の成功のためのひとつの有意

義な経験として位置づけ締めくくっている。スポーツ面における「ホープ激走」がそうであったように、「ハイライト」の記事は、敗者を主人公とはしていても「敗北」がそのテーマではない。そこでは、今後のレースで、そしてレース以外の生活領域において活躍する可能性を秘めたヒーローが主題化されているのである。

4. 社会面記事の構造

社会面には、「2002 駆ける 九州一周 駅伝」と題する囲み記事が10枚掲載された。そのほとんどは、これまでに他の紙面において確認してきた駅伝記事の中心的テーマ、すなわち「チーム間競争」をテーマとしたものであった。だが社会面で書かれる「チーム間競争」は、スポーツ面や県総合面における記事がそれを「個人間競争」、特にヒーローの活躍と関わらせて解説、説明するスタイルをとっていたのとは異なり、より多様な背景と接合されて説明されているという点で他の紙面にはない特徴を有していた。たとえば、「造船所の仲間に吉報誓う」と見出しがつけられたの記事(11月1日付)では、長崎県チームの主力選手が所属する三菱重工長崎で、駅伝開催直前に起きた豪華客船建設中の火災が取り上げられ、「『私たちにできることは、2位も視野にいれながらの3位奪還。毎日いいニュースを長崎に届けたい』と意気込む。」という総監督の言で結ばれているが、このような記事は、「チーム間競争」が「仲間への感謝」、「郷土愛」などといったテーマと関連づけられながら説明されているものと理解することができる。

駅伝の快楽

検討してきたように、九州一周駅伝を物語る多様なテーマの間には、図1に示すような重層的な関係を認めることができる。各紙面における記事の中心的なテーマは「チーム間競争」であったが、一面においてそれは、「九州らしさ」を構成するトピックスのひとつと見なすことができた。スポーツ面、県総合面においては、「チーム間競争」は「個人間競争」、特に「ヒーローの活躍」という観点から説明されており、さらにそうしたヒーローの活躍は「家族関係」や「世代間関係」などといった他の多様なテーマと接合され説明されていた。また社会面では、「チーム間競争」はより直接的に、「仲間への感謝」や「郷土愛」などといった他の多様なテーマと関連づけられながら説明されていた。したがって、新聞の九州一周駅伝の物語は、チーム間競争という中心的なテーマを、個人間競争やヒーローの活躍、さらには競争に関わる様々なテーマと接合したり、それをさらに他のテーマの一部として位置づけたりするようなやり方で構造化されているととらえることができる。

九州一周駅伝の物語の中心的なテーマは、チーム間の競争である。しかし、駅伝記事における「競争」は、他県チームとの競い合いを意味するばかりではなく、自チームの過去の記録、他県チームの過去の記録との競い合いをも意味する概念であった。つまり、新聞報道が描く競争の世界とは、「優勝劣敗」、「勝利至上主義」のそれではないのだ。同様のことは、「個人間競争」についてもいえる。そこには、他県チームの選手との競争が含まれているばかりでなく、自らがもつ過去の記録、あるいは過去に誰かが打ち立てた記録との競争も同時に含まれている。さらにこの場合の記録とは、区間タイムだけでなく大会出場回数や出走回数、区間賞獲得数、区間新記録の樹立回数などにも言及可能なものなのである。新聞が描く「ヒーロー」像についても同じことがいえる。それは、めざましい活躍や大幅

な区間記録更新を成し遂げた者を意味する概念であると同時に，精進を積み大会初出場を果たした「市民ランナー」に適用可能な概念でもあった．そればかりか，九州一周駅伝記事においては，敗者さえ次のレースやレース以外の生活領域において活躍するかもしれない「ヒーロー」として描かれていたのであった．九州一周駅伝報道における「競争」や「ヒーロー」は，おそらく誰にでも適用可能な概念なのである．

以上のように，九州一周駅伝の物語は，語りの多様性を限りなく広げていくようなやり方と，逆にそれに制限を課すようなやり方，そして制限された語りにさらに多様性をもたらすようなやり方で構造化されていると考えることができる．駅伝を語る快樂とは，おそらくこうした物語の構造の内側にある．

文献

- アング：山口 誠訳(2000)経験的オーディエンス研究の政治性について．吉見俊哉編 メディア・スタディーズ．せりか書房：東京．pp.203-225．
- Christopherson, N., Janning, M. and McConnell, E. D. (2002) Two kicks forward, one kick back: a content analysis of media discourses on the 1999 Women's World Cup Soccer Championship. *Sociology of Sport Journal* 19:170-188.
- フィスク・ハートレー：池村六郎訳(1991)テレビを<読む>．未来社：東京．pp.64-75
- フィスク：藤田真文ほか訳(1996)テレビジョンカルチャー - ポピュラー文化の政治学 - ．梓出版社：東京．
- フォスター：中野康司訳(1994)E. M. フォスター著作集8 小説の諸相．みすず書房：東京．p.129
- 橋本純一編(2003)現代メディアスポーツ論．世界思想社：京都．
- 井上 俊(2000)スポーツと芸術の社会学．世界思想社：京都．p.158．
- 伊藤 守(1999)テレビドラマの言説とリアリティ構成 - 「テキスト」と「読み」をめぐるポリティクス．伊藤 守・藤田真文編 テレビジョン・ポリフォニー - 番組・視聴者分析の試み - ．世界思想社：京都．p.104．
- Kinkema, K.M. and Harris, J.C.(1992) Sport and the mass media. *Exercise and Sport Science Reviews* 20: 127-159.
- 西日本新聞社(2003)高松宮賜杯 第52回 西日本各県対抗 九州一周駅伝競走大会(大会パンフレット)．西日本新聞社：福岡．pp.112-115．
- 奥 武則(2000)大衆新聞と国民国家 - 人気投票・慈善・スキャンダル - ．平凡社：東京．
- 佐伯聰夫(1997)メディア・スポーツ論序説：メディア・スポーツの構造と機能 - 問題の所在と分析の視点のために - ．*体育の科学* 47: 934．
- 津金澤聰廣編著(1996)現代日本のメディア・イベント．同文館：東京．
- 津金澤聰廣編著(2002)戦後日本のメディア・イベント：1945-1960年．世界思想社：京都．
- White, P.G. and Gillett, J.(1994) Reading the muscular body: a critical decoding of advertisements in *Flex* magazine. *Sociology of Sport Journal* 11: 22-23.
- 山本教人(2000)国内外におけるメディア・スポーツ研究の動向と今後の課題．九州体育・スポーツ学研究 14: 1-10．